

ちよつと ウワサ学

ウワサ＝重要×曖昧

サトウタツヤ

社会心理学ならではの、と言えるテーマの一つに「ウワサの研究」があります。

結論を先取りすると、何かがウワサ(流言)になるのは、それが重要かつ曖昧な情報だからです。

めったに発生しないけれど発生すると大変なウワサとして「金融機関の破綻」があります。多くの人が自分の預金だけは解約しておこうと考

え、大騒ぎになるのです。

有名な事件があります。1

973年12月14日、愛知県A信用金庫B支店に大勢の人が集まりました。この信用金庫がつぶれるというウワサが流れ、それを信じた人が詰めかけて、他の支店を含めて26億円が引き出されたのです。

この事件は、ウワサの発端が突き止められた稀な例としても世界に知られています。

警察が原因解明の捜査をしたからです。警察は、何者かがこの信用金庫を陥れようとして、あるいは世の中全体を混乱に陥れようとして、意図的に流したと考えたのです。

社会心理学ではウワサとデマを区別しています。ウワサは自然発生的に広がるもの。デマは「情報操作によって人を陥れようとする悪意ある情報」です。つまり警察は「デ

マ」と見立てたわけですが、ところが、捜査の結果わかったのは、この騒ぎは女子高生同士の他愛ない会話から発生したということでした。

この騒ぎに詳しい木下富雄・京都大名誉教授によると、発端は6日前。ある女子高生がA信用金庫に就職が決まったと友達に話したところ、「信



イラスト 梅田華代

用金庫は(経営的に)危ないんじゃないの?」とからかわれました。言われた女子高生が家族に話し、それがさらに口伝えされるうち、A信用金庫がつぶれるかもしれないという話に発展して広がったのです。

ここで重要なのは、女子高生のおしゃべりが取り付け騒ぎに発展するなら、そのような騒ぎは毎日起きてもおかしくない、ということ。けれども実際には、取り付け騒ぎはめったに起きません。

なぜでしょうか。ウワサの特性を理論的に説明しようとしたのがアメリカの心理学者、オルポルトとポストマンです。彼らは「R(ウワサの流布量)は、I(情報の重要さ)×A(情報の曖昧さ)に比例する」という仮説を提唱しました。

この式の面白いところは、「重要さ」か「曖昧さ」がゼロなら、ウワサは流れないという点にあります。

曖昧でも、重要でないことはウワサになりません。たと

えば「どの歯ブラシが良いかなどがそれにあたります。だから、そういう情報を多くの人に伝えるには、広告や広報が必要になるのです。」

重要だけれど曖昧でないこともウワサにはならない。たとえば「選挙の結果(得票数)」は、1票単位で正確に発表されます。もしも選挙管理委員会が「△△候補、約1万票を得て、次点に約20票差で当選」と発表したら、多くの人が臆測を流すことでしょう。

重要な情報に空白が生じると、人はそれを埋めようとして臆測を始め、その臆測を人に流すのです。それがウワサになるのは、テーマが重要だからこそです。

ウワサや、その結果としてのパニックを防ぐ立場にある人たちは、ウワサの法則を頭に入れ、重要な情報が曖昧にならないよう、常に心がけるべきです。情報を隠してウワサやパニックを防ぐことはできない、と社会心理学は主張しているのです。

(立命館大教授、心理学)